

参議院常任委員会調査室・特別調査室

論題	視点「桃太郎の「正義」
著者 / 所属	岩波 祐子 / 内閣委員会調査室
雑誌名 / ISSN	立法と調査 / 0915-1338
編集・発行	参議院事務局企画調整室
通号	462号
刊行日	2023-12-18
頁	2
URL	https://www.sangiin.go.jp/japanese/annai/chousa/rip_pou_chousa/backnumber/20231218.html

※ 本文中の意見にわたる部分は、執筆者個人の見解です。

※ 本稿を転載する場合には、事前に参議院事務局企画調整室までご連絡ください (TEL 03-3581-3111 (内線 75013) / 03-5521-7686 (直通))。

桃太郎の「正義」

内閣委員会 専門員

いわなみ ゆうこ
岩波 祐子

10年ほど前、日本プレスセンターで「しあわせ」をテーマにした新聞広告のコンテスト入賞作品を見た。目を引いたのは、「ボクのおとうさんは、桃太郎というやつに殺されました。」という子どもの手書き文字、その下方に鬼の子どもが泣いているイラストが描かれた広告で、タイトルは「めでたし、めでたし?」、下部に小さく「一方的な「めでたし、めでたし」を生まないために。広げよう、あなたがみている世界。」との記載があった。逆からの視点で考えさせる発想が抜きんできているなどと高く評価されて最優秀賞を受賞した山崎博司氏（博報堂）の作品だった（<https://www.pressnet.or.jp/adarc/adc/2013.html>）。

審査委員からのコメントに「鬼の子どもにとってはそうなんだ、と読み手の心に小石を投げるような作品だ」とあった。桃太郎の世界ではしあわせな結末でも、鬼の子どもの世界では悲劇である。桃太郎は鬼を撃退した「正義」の味方という昔話の「常識」も、鬼の視点から見ればひっくり返るということである。

視点を変えると判断は逆転する。正義や常識は絶対的なものではない。この広告を思い出したのは、某学会で、ある方と名刺交換したことがきっかけだった。当時、ある業界・市場に対する規制を強化すべきという議論が活性化していた。関係情報や資料に接した限りでは、当該業界・市場には本質的に問題があるという「正義」「常識」の論調が大勢を占めていた。その方は、そうした風潮に反し、保護されるべき利益があり規制や差別はおかしいと主張されていた。私自身も各種資料を客観的に読み込み咀嚼したつもりではいたが、その方が言葉を選びつつ淡々と持論を語られる姿に、自分の「正義」「常識」が一面的過ぎたかもと考え直さざるを得なかった。

何らかの「被害」が生じ、対応策として規制が検討される時、その被害が悲惨と感じられれば感じられるほど、同じ被害が繰り返されないよう、強い規制が求められるように思う。しかしこの結末は、本当に「めでたし、めでたし」なのか。

桃太郎の広告は話題になり、教材としても活用された。中学生からは「続・桃太郎」のストーリーとして「鬼による反撃があり悲劇が繰り返される」、「鬼に農業を教えれば村を荒らしに来ないので、農具を鬼が島に持っていく」などの物語が出されたという（<https://www.advertimes.com/20180214/article265783/>）。桃太郎の成敗は鬼から見れば攻撃で、反撃を招き、悲劇が繰り返される。根本的な解決を求めるのなら、その問題だけに注目するのではなく、視点を変え、一步引いて鬼が襲う動機を考え、その原因を解消する策を探すべきだとの切り口には脱帽した。これなら双方にとって「めでたし、めでたし」となる。

「正義」「常識」の対立はしばしば現実化する。そのときは議論を通じお互いに納得できる妥協点を、視点を変えつつ探し求める。それこそが、国民の負託を受けた議論の府、国会の最大の使命ではないか。その一助となれば、調査員としては望外の喜びである。